

菊地 浩平

### 『人形メディア学講義』

(河出書房新社、2018年)

村井 翔

本書の宣伝用帯には「早稲田大学文学学術院の2年連続『面白い』講義第1位が書籍化!」と麗々しく書いてある。実際その通りだし、この本の出版後のことではあるが、学生の発行する講義情報誌『マイルストーン・エクスプレス』が2019年版から、それまでの一年ごとの投票ではなく、二年分の学生アンケート投票を基に「面白い」講義ランキングを発表するという方針変更を行わなければ、3年連続第1位も可能であっただろう。授業内容は全く同一ではないものの、2018年は「精神分析入門」（他でもない私の特別研究期間中の代講科目）、2019年は「演劇文化論2」と担当講義科目名が変わっている菊地先生はこの方針変更で断然不利になってしまったからである。

いったいどこがそんなに人気なのだろうか、彼の講義に「もぐって」みたことがある。文句なしに面白かった。講義担当者の人形愛は誰にも伝わるものだったし、笑える映像を学生に見せながら、真っ先に先生自身が笑い転げてしまうあたりは、最近では「ぼっちゃり身体論」も論じる彼自身の身体から醸し出される「ゆるい」雰囲気とも相まって、ちょっ

と古びた若者言葉をあえて使うならば、実に「カワイイ」ものだった。これなら、ここ戸山キャンパスでは大半を占める女子学生の間で人気爆発となるのも当然。本書は講義に招かれた二人のゲストスピーカーとの対談を除けば、講義そのものを収録したものではないが、ネタの多くは彼の講義に由来するものだし、全体として人気講義のスピリットを良く伝えている。

球体関節人形など、これまでの人形論で好んで論じられてきたテーマをたぶん意識的にスルーしながら、従来の論点にとらわれず自由に論じているところ、論じる対象も狭い意味での人形に限らないところが本書の取り柄。だからガチャピン、ふなっしー等の着ぐるみも論じられるし、典型的な着ぐるみ怪獣である『ゴジラ』論もある。そして本書の白眉が、最後の第八章「最強ホラーとしてのアンパンマン」であるというのは、衆目の一致するところ。こういうものを論じても、著者がいわゆる「学問的」な手続きを全く怠らないのは、大いに称賛すべきだろう。たとえばゴジラ論では、今や膨大と言っても差し支えない関係文献が涉猟され、日本の伝

---

統的な細工人形の工法が着ぐるみゴジラの造型に利用されたこと、口の開閉など、第一世代の着ぐるみではできない動作を撮影するためにギニョールが併用されたことなどが明かされている。ちなみに、ギニョールとは操作者が内部に手を入れて扱う操り人形のこと、日本の特撮業界ではずっと、このフランス語由来の用語で呼ばれてきたようだが、より普遍的にはパペットと呼んでもよい。本書ではギニョールという言葉が最初に出てきた時、何の解説もないので、そのまま読んでいけばいずれ分かるとはいえ、読者は戸惑ったかもしれない。

さすがにアンパンマンを批評的に論じた論文・書物はまだほとんど無いようだが、アンパンマン論でも、原作童話の作者、故やなせたかしのコメントが丁寧に追跡されているのに感心する。泣ける名作と評判の『それいけ! アンパンマン いのちの星のドリー』(2006)が恐ろしい全体主義的ホラー映画だというお説には深く同意。それにしても、このアンパンマン映画といい、『クレヨンしんちゃん』の一エピソード『殴られウサギの逆襲だゾ』(2003)にしろ、面白いものを見つけてくる著者のアンテナの張り方には感心するしかない。2003年には著者は二十歳だったはずだから、子どもの頃に見た作品ではない、大人になっても見続けていたから発見できたというのも、一段とすごい。

と、ここまで一貫して誉めてきた本書だが、私も「身体論2」の講義担当三回分をすべて人形ネタに捧げる身。私と著者の人形観にはかなり決定的な溝があるので、最

後にそれを論じておこう。その溝は第1章で『トイ・ストーリー』シリーズ(4で完結の模様だが、ここで論じられるのは出版時に公開されていた3まで)を論じ、「人間とオモチャの間にある埋めがたい距離」(42頁)を肯定する時から、既に明らかだ。つまりこれが、この章の標題「『トイ・ストーリー』のオモチャたちはなぜ(本当は生きていることを、人間に)見られてはいけぬのか」の答えである。「本シリーズではオモチャと人間が過剰に寄り添ったり、安易に心の交流を図ったりしない。よってオモチャたちは人間になりたいとは言いたさないし、人間側が彼らを人間扱いすることもない」(42頁)。確かに仰せの通りなのだが、それはそっくりそのまま、私がこれら映画にあまり心惹かれない理由でもある。

私と彼との溝が最もはっきりするのは、第五章で論じられる2007年のアメリカ映画『ラースと、その彼女』の評価をめぐってであろう。あらすじを簡単に紹介しよう。

アメリカ中西部の小さな田舎町。心優しい青年のラースは、兄のガスと義姉カリンの家の敷地内の一軒家に一人で暮らしている。彼の出産時に母親が死に、自分が母親を殺したという自責の念から、特に女性とのかかわりを避けるようになった彼の社交といえ、週一回の教会への参列と会社での同僚とのおしゃべりぐらい。そんなある日、ラースが「彼女を家に招待した」と兄夫婦のもとを訪れる。内気な弟に恋人ができたこと喜んだのも束の間、現れたのはインターネットで購入した等身大人形(かつての言い方によ

ればダッチワイフ)。しかしラースはその人形をピアンカと呼び、「彼女」の生い立ちや性格を楽しそうに説明する。弟が完全に正気を失ったと嘔然とするガス。カリンはどうしたものかと、女医のダグマー・バーマンに相談を持ちかける。だが、バーマン先生は「まわりの人間がラースの幻想に調子を合わせ、彼の世界を受け入れてあげることが、問題の解決になるかもしれない」と助言。ガスとカリンはラースのために、町の人々にもピアンカを受け入れるよう理解を求める。戸惑いを見せながらもピアンカの存在を認めていく住人たち。そして、ピアンカがボランティアなど町の行事に参加するようになるにつれ、いつしか人々の間に失われていた町民同士の交流がよみがえってくる。それは、ラースの行動にも影響を与えた。ピアンカが町に溶け込んでいくにつれ、苛立ちを見せるようになってきたのだ。次第にギクシャクしていく二人の関係。だが、その本当の原因は、ラースが仕事仲間、もともと彼に思いを寄せていたマーゴという女の子の気持ちに気づき始めたことにあった。彼はピアンカを病気にし、ついには湖で溺れたことにして、彼女を葬ってしまう。

これは私が授業で配っているプリントほぼそのまま。できれば読み比べて、同じ映画について私と菊地氏がまとめている「あらすじ」が少なからず違うことを面白がって欲しいのだが。たとえば、「彼の出産時に母親が死に」という設定の、次へのつながり具合とか。さらに言えば、バーマン医師はこの田舎町唯一のクリニックを一人で切り盛りし

ている、この町でただ一人のお医者さんで、専門の「精神科医」（182頁）ではない。それは注意深く映画を見れば、必ず分かるはずだ。ともかくラース本人も、周囲の人々もみんないい人ばかりだし、監督以下、作り手たちも悪意を持っている人は誰もいないと思う。要するに、とても心温まるお話なのだが、人形はラースが人間の女性と付き合えるようになるまでの代用品に過ぎなかったという結末を誰もが自明視していることに、私は納得がいかない。

ずばりと言ってしまえば、キリスト教圏では神>人間>人形という序列（ヒエラルキー）が厳然とあるから、すなわち神は「自分の姿に似せて」（『旧約聖書』創世記）人間を作り、人間は同じく自分の似姿「ヒトガタ」として人形を作ったからである。だから人形が人間に取って代わられることは疑問の余地なく良いことであるし、『ピノッキオの冒険』のように人形が人間になるという結末はハッピーエンドと受け取られる。確かに本書にも書いてある通り、カルロ・コッローディによる原作小説版（1883）ではピノッキオは自我=魂はそのままに、人間としての新しい身体をもらったという設定になっていて、一番最後の頁は同じ部屋に掛かっている人形だった頃の自分の身体を眺めながら、独り言を言う場面で終わっている。「あやつり人形だったころのほくって、なんて滑稽だったんだろう。こうして、ちゃんとして人間の子になれて、ほんとうによかったな」（305頁）。近年しばしばそう論じられているように、子どもを型にはめ、規格化しようとする、いわば人間を

---

人形にしてしまおうとする19世紀末イタリアの教育思想に対する異議申し立てとしてコッローディがかなり悪いこともする、奔放な人形ピノッキオを作り出したとすれば、このピノッキオの最後の独白は字義通りには受け取れない、痛烈なアイロニーを含んだものとならざるをえない。しかももちろんディズニーアニメ版にはこの場面はないし、原作者の意図は長らく無視されてきた。

一方、石ノ森章太郎の漫画版(テレビの特撮番組と基本設定は同じだが細部、特に結末は異なる)『人造人間キカイダー』(1974)の最後のコマは「だが ピノキオは人間になって／ほんとうに／幸せになれたの／だろうか……?」という言葉で終わっている。キカイダーは仮面ライダーのようなサイボーグではなくロボット(機械人形)である。彼にはそもそも不完全ながら「良心回路」が取り付けられていて、自動的・機械的に善悪を判断して行動するようになっていた。だが物語終盤、彼を捕らえた悪の組織はキカイダーに「服従回路」を装着してしまう。結局、二つの回路はお互いを打ち消しあうように働き、彼は常に脳内会議を行って次の行動を決定している人間と同じになったのだ。そのため、彼は良心回路に抑止されていた、敵を騙すという行動ができるようになり、封印されていた必殺武器も使えるようになって、宿敵ハカイダーを一撃で倒してしまう。その代わりに、彼は「永久に『悪』と『良心』の心のたたかいに苦しめられる」ようになった。「人間になってほんとうに幸せになれたのか?」という疑問文の作品内コンテキストで

の意味は、そういうことである。そしてもちろん、これは神>人間>人形という序列を全く前提としない発言。

さらに言えば、日本のSFでは人間に一種の良心回路を取り付けて、いわば人形にしてしまおうという小説が、今世紀になってから現れているのは、とても興味深いと思う。アニメ映画にもなった伊藤計劃の最後の完成作『ハーモニー』(2008)である。舞台となる21世紀後半の未来では従来の各国政府に代わって、グローバルな統治機構「生府(せいふ)」(WHOの拡張版のようなものをイメージするとよい)の下でミシェル・フーコーのいわゆる生政治(Biopolitics)が全面的に押し進められ、文明世界の人々は皆、WatchMeという恒常的に体内状況を監視するナノマシンを身体に入れられて、病気なき長寿を享受し、コンタクトレンズ型のウェアラブル・コンピュータによって常時、ネットにつながれて生活していた。そればかりか、生府は人間の意志を制御し、葛藤なくすべての行動を自明に選び取らせるような「ハーモニー・プログラム」の開発を進め、すでに人々の脳に実装していた。ただし、このプログラムを起動した場合、脳内の葛藤が存在しなくなるがゆえに、人間の意識は消滅してしまう。「ハーモニー・プログラム」開発のワーキンググループは分裂しており、WatchMe ネットをハッキングして(開発途上国を除く)全世界の人々を自殺させるといふ急進派の脅迫に屈して、ついに生府もプログラムを発動せざるをえなくなるというのが、この小説の結末である。この結末は

一般にはディストピアであると理解されているが、それは自由意志=自我に至上の価値を置く場合に限ってのこと。私は、自我などというものは、やむをえずでっち上げられた間に合わせの「作り物」だという精神分析の立場に立つので、東浩紀風に言うならば、人間を「動物化」すること、欲求のままに行動しても環境世界と何の摩擦もなく生きてゆける存在にすることは大歓迎、それこそユートピアだと思う。

『ラースと、その彼女』の話題に戻ろう。菊地氏は、この映画のエンディングで見られるのは「人形との成熟した関係への『移行』」(197頁) だとして、ウニコットの「移行対象」という概念を引き合いに出している。移行対象とは、子どもが母親の身体の代理であるかのように特別な愛着を抱くぬいぐるみや毛布のこと。簡単に言えば、スヌーピー漫画『ピーナッツ』におけるライナスの毛布のことである。もちろんウニコットも、子どもから移行対象を強引に取り上げたりすべきではないと言っていて、その点では映画の中のパーマン医師と同じ立場である。それでも移行対象という言葉自体から「本来の」「正常な」愛着の対象が見つかるまでの代替物というニュアンスは払拭しがたい。これに対し私は、人間存在の欠くべからざる根幹をなす欲望の対象は、どこまでいっても「対象 a」、つまり部分対象であり、「本来の」「正常な」対象など存在しない、たとえばある人

が恋人の全人格を愛していると思ひ込むのは錯覚に過ぎない、よりセンセーショナルな言葉を借りれば「性的関係など存在しない」と主張するラカンの立場にくみする。

たぶん私のセンスは菊地氏が意識的に距離を置こうとしている澁澤龍彦のような古い世代の「人形愛」論者に近いのだと思う。それでも、LGBT がここまで肯定されるこのご時世、どうしてもリアルな被害者を伴う児童ポルノを消費せざるをえないペドフィリア(小児性愛)の人々と違って、生身の人間を人形化しようとしないう限り、社会に何の迷惑もかけない人形愛(ビュグマリオンズム)の人々はもっと擁護されるべき、白眼視されるべきでないという私の考えは変わらない。もちろん、彼らの愛に「生産性」がないことは確かだ。でも、ケルトの吟遊詩人たちが語り継ぎ、ヴァーグナーのオペラに至る『トリスタンとイゾルデ』、ダンテ『神曲』のパオロとフランチェスカ、シェイクスピア『ロミオとジュリエット』。これらカップルのうち誰が、子どもを作っただろうか？ 精神分析の主張する通り、人間の性的欲望の99%は子作りなどに関わらぬファンタジーに向けられたものだし、生産性を問題にするなら、人類の文化的営為の大半を否定することになる。どうか皆さんにも人形との良い出会いがありますように。少なくともこの点に関して、著者と私の間に溝はない。

(むらい・しょう 早稲田大学文学学術院 教授)